

1 野々宮神社は、伊勢神宮に赴く斎宮（未婚の皇女）が、出発前、心身を清めたとされる場所。「光源氏と六条御息所の別れの舞台としても有名なんですよ」。『源氏物語』にまつわるエピソードも交えてご紹介。

2 大学の授業のあと、人力車を引くことも。京福嵐山本線、通称「嵐電」に乗って嵐山駅に到着。

3 お客さまをお乗せして、さあ、出発。人力車の高い座席から眺める嵐山の町並みは、また格別です。

4 「お気をつけて、ゆっくりどうぞ」。お客さまの乗り降りにも、気を配ります。

5 百人一首で有名な小倉山の、常寂光寺でのガイド。運慶の作とされる仁王像や、藤原定家にまつわる話に、「詳しいですね」とほめられ、「京都校定」を受けてみようかな?とにっこり。

6 「おつかれさん」「今日はどうやった?」。ひと仕事終え、仲間の俵夫さんたちと、ほっとひと息。

7 1日の仕事を終えると、人力車の清掃に取りかかります。座席シートを整え、梶棒や泥除けを丁寧に磨きます。

8 暢子さんが大好きな嵐山は、その昔、平安貴族たちが愛した景勝地。山や川がおりなす情景は、まるで墨絵のよう。



人力車のえびす屋
<http://www.ebisuya.com/>

今月のげんきさん

加納暢子のぶこさん
 21歳

手ぬぐいに笠、黒の胸当てに地下足袋の足。俵夫姿の暢子さんが、人力車にお客さまを乗せ、嵐山の表通りへと走り出します。

「すんまへーん！人力車、通らしてもらいます」

道をゆずってくれた車や人に、「おおきに」と挨拶すると、「おや！元氣やなあ」「まあ、女の子なのね。がんばって」。すれ違う人々が、笑顔で声援を送ってくれます。

暢子さんが、「えびす屋」で俵夫のアルバイトを始めたのは、昨年の秋のこと。大学に通うかたわら、人力車で京都、嵐山・嵯峨野路をめぐる、観光案内をしています。

「今しかできない、京都ならではの仕事がしてみたいと考えていた時出会ったのが人力車でした」

それほど運動好きでも、体力に自信があるわけでもない、という暢子さん。最初は試練もありました。

「研修中の雨の日に、きつい坂道を登ることができなくて。くやしくて、何度も挑戦したことは、忘れられない思い出です」

今では、嵐山の玄関口、渡月橋から、往復2時間ほどの範囲を、朝

ら日暮れ時まで何往復も走る日も。「お子さんなら、3人くらい乗せちゃっても平気」と、頼もしく笑います。

周辺の道筋や、名所の知識も求められる俵夫の仕事。

「限られた時間の中、お客さまの行きたい所を効率よくご案内できて、『楽しかったよ、ありがとう』って言ってもらえるのが、一番嬉しいですね」

大学4回生の暢子さん。来春の卒業後は、製菓メーカーへの就職が決まっています。新しい世界に期待がふくらむ一方、大好きな京都とはお別れになりそう。

「どこで暮らすことになっても、時々嵐山を訪ねたいと思っています。山々に囲まれて、神社仏閣が自然に溶けこんだような、この風景が大好きなんです」

春の訪れは、まだ、もう少し先のこと。暢子さんの引く人力車は、その日まで、嵐山の町角を、嵯峨野の竹林の中を駆け抜けていきます。

撮影／竹内裕一

*このページに登場してくださる方を募集しています。詳しくはP37をご覧ください。